



保育の中の物語(5)

「隣に座らないで」

～ 理不尽なこと ～

岸井慶子

帰りがけの集まりで、先生が絵本を読んできるといふ。

(1)「私の席がない」

A子(四歳児)は急いで椅子を持ってきて、一番前の中央に位置を取った。先生の真ん前。絵本が一番よく見えるところだ。だんだん周りに人が増えてくる。左右にもクラスメートが椅子を持ってきて並んで腰かける。二列目、三列目にも並ぶ。突然、A子は背中をドンと押された。椅子から飛び出して前につんのめった。転びそうになったけれど、何とか踏みとどまれた。振り返るとA子の席がない。後から来たB男が、後ろからA子を突き飛ばし、素早くA子の



席に腰掛けたのだ。いったい何が起きたのかわからない A子は、その場に立つたまま、キツネにつままれたような表情で周りを見ている。「確か、私の席はこの辺りだった」というように。けれども空いている席は一つもない。B男は何事もなかったようにしている。

A子はしばらくその場に立っていたが、「仕方がない、もう一度、椅子を持ってこよう」と気持ちを切り替えたのか、廊下に片づけてある椅子を走って取りに行く。

(二) 「隣に座らなごい」

A子は、急いで(自分の座っていた場所の前まで戻って)椅子を持ってくるが、椅子を置けるようなすき間はない。椅子を抱えながら「何なのよ。なぜなの」と、不満そうにほほを膨らませて立っている。

やがてあきらめたのか、A子はゆつくりと、一列目の端に歩き始めた。せめて一番前で先生の読んでくれる絵本を見たかったのだろうか。

そのとき、一番端に座っていたC子が、A子をすごい顔で下からにらみつける。声は小さいが口を大きく開けて「だめー、座らないでよ」とA子に向かって言う。まるでかみつきそうな雰囲気だ。おまけに、A子が椅子を置こうとし



た場所に右足を大きく広げて邪魔をする（何ということだろう。子どもでもこんな怖い顔をして、相手をにらみ、隣に座ることを拒否するのだ。A子の気持ちになってみたらいいのに）。

A子は、C子を避けるようにして列の後ろのほうに並ぶ。みんなが並んでいる列から後方に少し離れている（この位置取りが、A子の置かれた状況や気持ちを表しているようで、見ているほうが苦しくなる）。悲しくなってきたのだろう、A子の目に涙がにじんできている。両手の甲でそっと涙をぬぐった。

そのとき、先生が「八百屋のお店に並んだ品物見てごらん……」と遊び歌を始めた。A子は涙をぬぐいながら、歌に合わせてそっと手を打った。「トマト（パチパチ）ニンジン（パチパチ）ダイコン（パチパチ）キュウリ（パチパチ）」と先生とクラスメートの掛け合いが続く。歌に誘われ拍手も大きくなり、A子の表情が落ち着いてきた。最後に、先生が「ぼうし」と歌ったとき、A子にはっこり笑った。

幼稚園での一日は、大人が想像する以上にいろいろな出来事に満ちている。うれしいこともあれば、納得のいかないことや悲しいこともたくさんある。でも、せめて一日の終わりは、気持ちよく終わりにしたいものだ。VTRを撮り



ながら「こんなに理不尽なことが起きて、この子は気持ちが悪かったまま帰宅するのだろうか」と心配だった。しかし先生の遊び歌で、みるみるA子の表情が変わり、最後にこの満面の笑顔が現れたとき、正直言ってホッとした。このとき、帰りがけのひと遊びや、手遊びのもつ意義を再認識した。当然のことながら、担任の先生はこんなドラマがあったことにはおそらく気づいていない。しかしまるで何もかも知っていたかのようにこの子の気持ちを回復させた。

また、涙ぐんでいるA子の様子を誰も知らなかったわけではない。足で邪魔をしたC子の近くに座っていた女兒が「振り返って」心配そうに見ていた。まだ助けたりはしないけれど、後ろに座った女兒の悲しさや不満をわかっているのだ。ここでも、予想を超える子どもの力を見せつけられた気がした。

「座らないでよ」と邪魔をしたC子は、特に問題がある子ではない。不可解だったので、翌週にもう一度様子を見に行つた。ごく普通のやさしい女の子だった。この場面だけで判断してはならないと思う。この出来事の前に、何が起きていたのかを観察者の私は知らないのだから。私には見えなかったけれど、C子にはC子の違うドラマがあったに違いない。現に、私は(二)の場面に心を奪われ、(一)の場面でA子に起きた理不尽なできごと気づいたのは、ビデオを十回以上も繰り返し見た後だった。

(鎌倉女子大学短期大学)